

4. 事業成果

4-1. 成果のまとめ

4-1-1 学術的視点からの成果(藤野博/東京学芸大学教職大学院)

本事業において得られた成果について学術的な視点から評価する。事前調査で明らかになった学校教育へのICT導入の問題点と、それに対する本事業での取り組みの結果についてまとめ、ICTを活用した教育が先進的に行われている北欧での研究知見を参照しながら考察を加える。

【問題1】

学校組織のICTに対するネガティブな反応がある。

【結果1】

5年生に一人一台タブレット環境を整えたことで教師のモチベーションが高まった。



一人一台タブレット環境

【考察1】

北欧では「デジタル・インクルージョン」の理念のもとに、学校教育におけるICTの活用が行われてきており、ICTリソースはどの学校にも平等に整備されている(Rohatgi et al., 2020)。本事業の取り組みの中で、1学年ではあっても一人一台タブレット端末が利用できる状況を作ったことは、デジタル・インクルージョンの実現に向けた最初の一步としてまず評価されるべき成果といえる。

【問題2】

教師のICT環境が整っておらず、使うアプリケーションが限られている。

【結果2】

Flipgridを本事業で使用するアプリケーションとして導入したところ、それ以外の場面でも利用がみられるようになった。

【考察2】

高度なデジタル学習ツールよりも、教室で汎用的に使えるデジタルツールの方が教師の使用レベルは高いことが示されている(Fraillon et al., 2019)。本事業で使用したFlipgridは特定の学習内容に特化したものでなく汎用性があるアプリケーションであり、学校教育で幅広く使われている。それをICT教育のプラットフォームのひとつとして導入した点も、ICT使用を促進する重要な要因になったと考えられる。

【問題3】

教師のICTスキル習得の場、機会が個人に依存している。

【結果3】

オンラインセミナーを開催し、発表する機会を教師に与えることでICT活用に自信をもたせることができ、スキルの習得も進んだ。

【考察3】

コミュニケーションや情報共有を目的としたICTの利用は、教師のスキルや知識を高めることにはつながっても、それだけではICTを教育実践に統合するには不十分であり、教師養成や職能開発にICTを組み込む必要があることが指摘されている(Hatlevik, 2017)。オンラインセミナーの開催は職能開発の機会になり、教育実践の中でのICT活用への意識が高まったと考えられる。また、本事業の中心メンバーが、支援テクノロジーを活用して障害のある人への支援について考える場であるATACカンファレンスに定期的に参加し、特別支援教育の実践家・専門家と交流を広げ、そこで得た情報を校内で共有できたこともICT活用に関する教師の職能を高めることにつながったことが推察される。



職能開発の機会になるオンラインセミナー

そして、教師の自信、すなわち自己効力感が高まったことは非常に重要な成果であると評価できる。北欧の調査でも、ICT使用に関する自己効力感が十分なレベルに達した教師は教育実践にICTを導入する可能性が高いことが示されている(Hatlevik, 2017)。また、ICT利用に否定的な意見を持つ教師やICTに関する自己効力感が低い教師は、高いレベルでICTを活用する同僚との協働に困難を感じるという指摘もある(Rohatgi et al., 2020)。個々の教師の自己効力感を高めることは教師間の協働を促進するという知見に照らすと、その点で本事業において非常に重要な成果が得られたと考えられる。

学習者の多様性への対応はスタッフ間の協力と実践の共有から始めるべきであるとの指摘もある(Ainscow et al., 2016)。教師間の協働をいかに進めていくかは今後さらに検討されるべき重要な課題であろう。

【問題4】

ICTについて相談する先がある学校ではICTの有効性が認められ活用が進むのに対し、相談先がない学校では活用が進まない。

【結果4】

学年に一人ICTに強い教師がいる5年生では活用が破格に広がった。

【考察4】

学級でICTを頻繁に利用している教師は教師間の協働に肯定的であるという知見がある(Fraillon et al., 2019)。ICTに強い教師がいる一学年でICTの活用が広がったことは、まさにこの知見を支持する結果であったと推察される。前述したセミナーの開催などは学年を超え学校全体へのICT活用の広がりをもたらし、促進する可能性があると考えられるが、まずは身近なところからの情報や実践の共有が重要であろう。

【引用文献】

Ainscow, M., Dyson, A., Goldrick, S., & West, M. (2016) Using collaborative inquiry to foster equity within school systems: Opportunities and barriers. *School Effectiveness and School Improvement*, 27, 7–23.

Fraillon, J., Ainley, J., Schulz, W., Friedman, T., & Duckworth, D. (2019) *Preparing for life in a*

digital world: The IEA international computer and information literacy study 2018 international report. Cham, The Netherlands: Springer.

Hatlevik, O. E. (2017) Examining the relationship between teachers' self-efficacy, their digital competence, strategies to evaluate information, and use of ICT at school. *Scandinavian Journal of Educational Research*, 61, 555–567.

Rohatgi, A. et al.(2020) Digital Inclusion in Norwegian and Danish Schools: Analysing variation in teachers' collaboration, attitudes, ICT use and Students' ICT literacy. In T. S. Frønes, A. Pettersen J., Radišić & N. Buchholtz (Eds.) *Equity, Equality and Diversity in the Nordic Model of Education*. Cham, The Netherlands: Springer.

4-1-2 教育実践的視点からの成果

東京学芸大学附属小金井小学校5・6年生を対象にデンマークの学校3校との交流を行った。5年生については、総合的な学習の時間の活動として担任教諭が先導して、6年生については英語活動の枠内で専科教諭が先導して行った。この児童同士の交流を進めていくために、デンマーク側の教員とオンラインミーティングやFlipgrid、電子メール等で行き取りしつ、共同でプロジェクトを推進していった。

このプロセスの中で、各教員には様々な学びがあった。デンマークの教員から学ぶこともあれば、交流の技術的側面からICT活用について新たな発見をする教員もいた。

コロナウイルス禍での学び

鈴木秀樹（東京学芸大学附属小金井小学校）

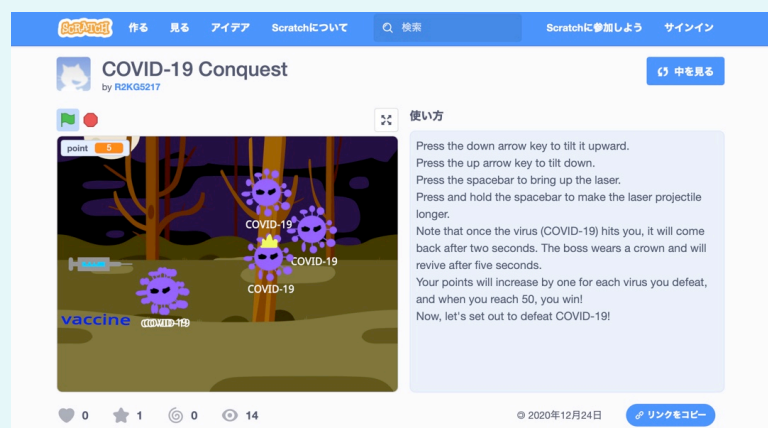
Flipgridによる交流を通じて送られてきた中で、非常に衝撃的だったものがある。クリスマス休暇を直前に控えた頃、デンマークではコロナウイルスの感染者が激増し、再びロックダウン状態に入った。本交流相手の児童も家庭からアクセスするしかなくなったわけだが、その最中に送られてきたメッセージには胸を打つものがあった。意識すると以下のようなものだ。

「ねえ、俺たちはまた家にいなさいだつてさ。全然ダメだ。俺たちは家に戻されて、家で学校の勉強をしなければならないんだよ。家のパソコンから。2021年まで家にいなければならない。クリスマスには期待している。クリスマスは、12月24日には、プレゼントがもらえる。コロナは最悪だ。学校にはパソコンで行けても友達には会えない。じゃあね。」

その暗い表情とも相まって、コロナウイルス禍に対するやり場のない怒り、嘆き、哀しみが伝わってくるこのムービーを教室で見せた時は、子供たちも静まり返っていた。

このムービーを見た子供たちから出てきた「メッセージを送りたい」「Scratchでゲームを作って、家にいなければならないデンマークの子供たちを励ましたい」という意見を後押しして送ったところ、デンマークからは温かい反応がいくつも返ってきた。

こうした交流を進めながら、デンマークの教員と何度もやり取りをくり返していたわけだが、一番感心したのは彼らのバイタリティであった。日本でも4～5月は、ほぼロックダウンの様相を



デンマークに送ったScratchのゲーム

呈していたが、その時のことを思い出すと、なかなか明るい気持ちにはなれなかったし、前向きなことを考えるのにはそれなりのエネルギーを要したのを覚えている。

しかし、デンマークの教員は、厳しい状況にあるにも関わらず、このプロジェクトにとっても積極的で「こんな時だからこそできることを何でも進めよう」「ICTがあれば場所も時間も関係ないのだからどんどん交流を進めよう」「次は何をする?」というような反応がすぐに返ってきた。ICTに関する習熟度が違う、ということはあるだろうが、ここまで積極的なのはやはり教育そのものに対する根本的なポジティブさが違うと感じられた。

今回、児童の交流を協力して進める中でデンマークの教員から学んだことを今後の指導にどう活かしていくかが求められているのは間違いない。ICTを活用し、インクルーシブ教育の発想を実現する公立校を先導できるような先端的な実践を進めていきたい。

世界を身近に感じられるオンラインでの交流

加固希支男（東京学芸大学附属小金井小学校）

今回、Flipgridを使ったデンマークの小学生との交流を学年で行った。デンマークの小学生から送られてきた動画を見ることで、日本以外に住む子供たちが、どのような気持ちでコロナ禍の中を過ごしているのかを知ることができた。Flipgridというアプリを使うことで、非同期ではあるものの、海外に住む同じ年代の子供たちと交流した経験は貴重な経験となったことだろう。自分の周りにいる子供たちだけではなく、世界中の子供たちの気持ちを身近に感じることで、視野を広げることにつながったと考えられる。

デンマークから送られてくる動画の中には、コロナ禍に関するネガティブな気持ちを語ったものもあった。日本にいる子供たちも、デンマークの子供たちと同様、ネガティブな気持ちになっている子供もいた。しかし、ネガティブな気持ちを聞くことで、「世界中の子供たちが同じ気持ちなのだ」ということを感じ、気持ちが前向きになっていく様子が見られた。実際、デンマークの子供と数回のやり取りを行う子供もいて、自分から前向きな気持ちを発信していこうとする子供の姿も見られるようになった。

学年全体を見ると、Flipgridを使った交流を行うことを前向きに捉えている子供が多かったが、中には知らない人に自分の動画を送ることに抵抗を感じていた子供もいた。Flipgrid自体は、特定の相手しか見ることができないものだが、その画面を撮影することはできる。そういったことに対して抵抗を感じているということだった。これは情報モラルという面では評価できるものである。よって、そういった子供についてはデンマークの子供との交流を無理強いすることはしなかった。

今回のデンマークの小学生との交流を進める中で、子供たちの視野が自然と広がっていくことが実感できた。日本にいただけだと、世界というのはとてつもなく遠く感じ、日本以外に住んでいる子供は自分たちとは違うと感じている子供も多かったはずである。しかし、デンマークの小学生と交流することで、同じ悩みを抱え、同じ感覚をもっていることを感じたはずである。オンラインで海外の小学生との交流を行うことで、世界を身近に感じることもつながっていった。今後も、オンラインで海外の小学生との交流の機会を設けていければと思った。

子供の学びに寄り添う教師のかかわり

佐藤牧子（東京学芸大学附属小金井小学校）

本事業の交流が始まり一か月ほどで、デンマークではCOVID-19の感染拡大を受け、5年生以上の子供は在宅でのオンライン授業となった。この対応は国として方針が示されてのことであった。そのため計画していた“WizeFloor” (<https://www.wizefloor.com>) を使った交流ができなくなってしまったことが残念であった。日本

でも2020年3月にCOVID-19の感染拡大を受け、全国的に学校が臨時休業となった。その時、多くの学校は手渡しや郵送などでのテキストなどの配布、または一斉メールやWEBサイトを経由した課題の配信という対応が多かった印象であった。同じような臨時休業に対して日本とデンマークとの大きな対応の違いを感じたエピソードであった。デンマークではインフラ整備が進んでおり、日頃から学校や家庭で自分のアカウントにログインし、1日の授業のスケジュールを見たり宿題を確認したりするなどスキルの定着が以前からあった。こうした環境面や日常的なICT活用が進んでいるなどの環境面の違いは、オンライン授業への移行に影響していることが推察された。



WizeFloor

今回“Fripgrid”を活用した交流では、デンマークの学校から、休校に伴いをオンライン授業に切り替えるときの工夫や配慮について、具体的な対応などを学んだ。子供の学習課題は日常の学校の授業とは違い、大きな課題を一か月くらいの単位で提示し、それぞれの子供のペースで進める工夫がされていた。課題を一人で進める子供もいるが、教師は少人数でのグループで進めるように促している。日本ではグループ活動において、機械的にグループを編成したり、習熟度などに合わせて進めたりすることが主流であるが、交流先の学校では誰と課題を進めるのかについて、子供に任せている部分などは大きな違いが見られた。教師はグループや個々の活動を見守りながら、活動が停滞したり、息詰まったりした段階で介入するようにしていたと語られた。また教育的サポートが必要な子供に個別に対応しながらも、徐々に少人数のグループの活動へ移行するなど個別対応に留まらず、インクルーシブの視点でもともに学ぶ点が重視されていた。教師は学習課題を設定し、コーディネーターとして子供の学びに寄り添う役割が大きいということが、デンマークと日本との大きな違いであった。

Flipgridによる学校教育の可能性

中村 香(東京学芸大学附属小金井小学校)

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言により、本校も3ヶ月間(昨年の3月1日から5月末まで)学校が休校となった。こんなことは、自分の子供時代も含めこれまでにないことだった。学校が再開した時、子どもたちはいつになく静かで会話も少なかった。また、感染対策のため、授業中の子供同士の会話やグループ活動が制限された。しかし、担当する英語の授業にFlipgridを活用したことで、時間と空間を越えた学び合いが可能となった。

最初に、6年生と5年生とのFlipgridによる交流を行った。6年生は、自己紹介と3月に予定していた”This is my hero.”のプレゼンテーションを、5年生は自己紹介を、動画にした。お互いに動画の相手にメッセージを返した。5年生から6年生に、「すらすら英語を言えていてすごい。自分も〇〇くんのように英語が話せるようになりたい。」、6年生から5年生に、「自分が5年生の時に、そんなにスラスラ英語を言えなかったので、こんなにしっかり英語を言えていてすごい。5年生に負けないようにがんばろうと思った。」などのメッセージがあった。時間と空間を超えた異学年交流による学び合いが見られた。

2学期には、Flipgridで6年生と留学生が交流をした。6年生がグループごとに日本文化についてクイズを考え動画にしたものへ留学生から返信をもらった。日本の文化を伝えたい想いから、内容を吟味し、写真や音楽、パワーポイントを活用するなど、英語力だけでなくプレゼン力もアップする姿が見られた。子供の振り返りには、相手に伝わった喜びと達成感とともに、もっと外国の人と英語で交流したいという想いも書かれていた。時間と空間を超えた学校の外との交流が可能となった。12月からは、デンマークの子どもたちとの交流が始まった。Flipgridで時間と空間を超え、遙か遠く異国の小学生と繋がることができた。海外の小学生と、コロナ禍での生活について動画で交流ができることに、期待を膨らませる子どもたちは、自己紹介動画からテンションが高まっていた。しかし、ロックダウン

4-1-3 学術的視点と教育実践的視点の融合的視点からの成果

4-1-1,4-1-2で明らかにした本事業の成果を融合し、今後国内の教育現場で生かせるような形で提案していくためには、ICT活用の側面と、インクルーシブ教育の両面から整理して提案していくことが重要であると考えます。また、全国でGIGAスクール構想がスタートしたタイミングでもあるので、児童は一人一台のタブレットを手にしているということを前提とした提案である必要があるだろう。

そこから考えるに、本事業で得られた成果は以下のようにまとめられる。

【ICT活用の側面】

様々な面から教員をサポートする仕組みを構築することが必須である。

●一人一台タブレット環境を活かす教員側環境の整備

GIGAスクール構想によって一人一台タブレット環境が実現する。これにより児童の学習環境は飛躍的に改善されるが、教員側の環境については課題が多い。児童と同程度以上の端末を持つこと、新しい環境での様々な試行をする時間的な余裕等が必要である。逆にそれらを確保すればICT活用は大きく進む。

●「発表する機会」＝「認められる機会」の創出

現代の教育現場は様々な課題に追われており、教員はそれをこなすのに精いっぱい新しいことに取り組もうという意欲を持ちづらい実態がある。それに対して、指導主事や管理職が指導をするよりも、新しいことに取り組んだことを認めるような機会の創出の方が効果は高いだろう。何らかの「発表する機会」、即ち「認められる機会」を設けることは、新しいことに取り組もうという教員を支えることになる。本事業で言えば、定期的なオンラインセミナーの開催と、そこに教員を代わる代わる登壇させることが、教員の意欲を大きく高めることになった。

●支援員を配置し、それが効果的に機能するような工夫をする。

特にICTに対して苦手意識を持っている教員にとっては、何かあった時にすぐ聞ける体制、ICT活用の準備を手伝ってくれる人員が配置されている体制は非常に心強い。本事業では、Flipgridという活用経験のないアプリをメインで使ったので、それについてのサポートを担当する支援員を配置したが、これは非常に有効に機能した。

【インクルーシブ教育の側面】

●児童の心に寄り添う指導

休校や都市のロックダウンといった状況について差はあるが、コロナウィルスの影響で通常の学校生活を送ることができないことに関しては、日本もデンマークも変わらない。デンマークの方がかなり深刻な状況であるが、本事業を通じて印象的だったのはデンマークの教員の前向きさと、それに基づく細やかな児童への配慮であった。ICT環境に関しても日本同様、家庭によってはなかなか協力が得られない場合もあるようだが「できることをやってみよう」というバイタリティには学ぶことが多かった。日本の教員の方が「運動会ができない」「宿泊行事ができない」といったことでネガティブになりがちなくらいで、この点に関してはマインドを変えていく必要があると考えられる。

●児童を信頼する

学習に様々な困難を抱えている児童がいることは両国共変わらないが、デンマークの方が児童に「任せている」場面が多かったことは参考にすべき事項であった。「支援」というと教員の側が考えに考えたものを「与える」というようになりがち側面があるが、デンマークでは「誰と学習を進めるか」といったことの決定を児童に任せる場面などもあった。インクルーシブ教育は、大人が「インクルーシブになるように」と手を回して実現するものではなく、児童が自らインクルーシブな環境を作れるような雰囲気を実現することに鍵があるということは、今後活かしていきたい学びであった。

4-2.成果普及

4-2-1 学会等研究者のネットワークにおける成果の共有・普及実績(オンライン含む)

8月22日(土)

東京学芸大学附属小金井小学校ICT部会オンラインセミナー「学びを止めないTeams活用」vol.4

概要:本事業の一環として行う日本とデンマークの児童が行う交流の基盤となる一人一台タブレット環境の活かし方について鈴木秀樹(東京学芸大学附属小金井小学校)が発表すると共に、小池翔太氏(千葉大学教育学部附属小学校)、狩野さやか氏(ジャーナリスト)とパネルディスカッションを行う。

アクセス数:教育関係者約150名

9月4日(金)

国立情報学研究所【第15回】9月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム

概要:コロナウィルス禍でのオンラインを活用した実践についてのシンポジウム。鈴木秀樹が登壇し、本事業での取り組みを含めて附属小金井小学校のオンラインを活用した取り組みについて発表した。

アクセス数:教育関係者約150名

9月19日(土)

東京学芸大学附属小金井小学校ICT部会オンラインセミナー「学びを止めないTeams活用」vol.5

概要:本事業の一環として行う日本とデンマークの児童が行う交流の基盤アプリケーションとなるFlipgridはじめ、各種アプリケーションの活用方法について鈴木秀樹(東京学芸大学附属小金井小学校)が発表した。

アクセス数:教育関係者約100名

10月20日(火)

第68回理科おもしろゼミONLINE

概要:「指導と評価の一体化」をテーマにした理科教育のオンラインセミナーで、本事業の取り組みから得られたオンラインを活用した指導法について三井寿哉(東京学芸大学附属小金井小学校)が発表した。

アクセス数:教育関係者約50名

11月7日(土)

東京学芸大学附属小金井小学校ICT×インクルーシブ教育セミナー

概要:ICTを活用したインクルーシブ教育の実現をテーマに行っているセミナー。実際の授業場面等も紹介しながら、鈴木秀樹、佐藤牧子(東京学芸大学附属小金井小学校)が中川一史(放送大学)、坂井聡(香川大学)とパネルディスカッションを行った。

[1人1台とデジタル教科書で、学びが困難な子が救われる——「東京学芸大学附属小金井小学校 ICT×インクルーシブ教育セミナーVOL.3」レポート① - こどもとIT \(impress.co.jp\)](#)

[「わかる」のに「できない」、ICTで学べる自分を取り戻す——「東京学芸大学附属小金井小学校 ICT×インクルーシブ教育セミナーVOL.3」レポート② - こどもとIT \(impress.co.jp\)](#)

アクセス数:教育関係者約200名

12月5日(土)

ATACカンファレンス2020

概要:本事業の交流によって得られた知見を中心に、学びに困難を抱えた児童に対するICTを活用した支援について鈴木秀樹、佐藤牧子が発表した。

アクセス数:特別支援教育関係者170名

12月11日(金)

授業UD学会オンライン研修会

概要:ユニバーサルデザインの授業研究を中心とした学会の研修会に鈴木秀樹が講師として参加。本事業の成果を踏まえてICTを活用したインクルーシブ教育について発表した。

アクセス数:学会員約70名

2月6日(土)

東京学芸大学附属小金井小学校ICT部会オンラインセミナー「Side by SideのICT活用」vol.1

概要:デンマークの学校で広く使われているWizeFloorの効果的な活用方法、本事業の一環としてAlexandra Instituteとの技術協力により利用したアプリケーション等について佐藤牧子が発表した。

アクセス数:教育関係者約120名

2月7日(日)宇大教育実践フォーラム

概要:「コロナ禍における子供の学びの可能性」と題された宇都宮大学のシンポジウムに鈴木秀樹が登壇。本実践で行われたオンラインを活用した国際的な学びについて発表した。

アクセス数:教育関係者約150名

4-2-2 初等中等教育機関の教育現場への成果の共有・普及実績(オンライン含む)

11月20日(金)

松江市ICT研修会

概要:島根県松江市の研修会に講師として参加。本事業の成果を踏まえたICTを活用したインクルーシブ教育の実践について鈴木秀樹が、デンマークでも深刻な問題になっているコロナウィルス禍で傷ついた児童に対する心のケアについて佐藤牧子が発表した。

会場:島根県松江市意東小

参加者:松江市教員約50名

11月30日(月)

富山県朝日町立さみさと小教員研修会に講師として参加。本事業の成果を踏まえたICTを活用したインクルーシブ教育の実践について鈴木秀樹が発表した。

会場:富山県朝日町立さみさと小学校(鈴木はオンラインで講演)

参加者:さみさと小および近隣小教員約30名

2月2日(火)

厚木市ICT研修会

概要:神奈川県厚木市教育委員会ICT研修会に講師として参加。本事業の成果を踏まえたICTを活用したインクルーシブ教育の実践について鈴木秀樹が発表した。

アクセス数:厚木市教育委員会、厚木市教員約50名

4-2-3 成果普及に関する今後の見通し(オンライン含む)

①オンラインセミナー「Side by SideのICT活用」の定期的な開催

しばらくはコロナウィルス禍での活動を余儀なくされることが予想されるので、オンラインを活用して本事業の成果を発表していくセミナーを定期的を開催していく。セミナーの内容については、後日、必要な編集を施してYouTubeチャンネルにおいても公開し、広く社会に訴えられる形を整える。

②「ICT×インクルーシブ教育セミナー」vol.4の開催

毎年、行っているセミナーであるが、次回は本事業の成果に

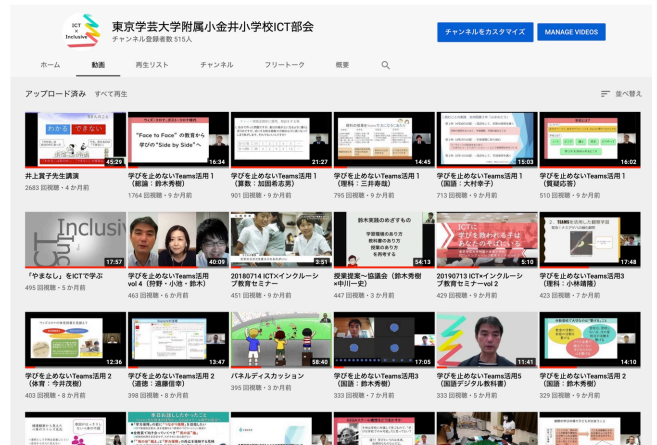
ついても盛り込んだ内容として開催する。秋の開催を予定しているが、可能であればマイクロソフト品川本社セミナールームで、コロナウィルス対策でそれが難しい場合にはオンラインで開催する。

③PCカンファレンス2021での発表

CIEC(コンピュータ利用教育学会)のPCカンファレンス2021(開催地未定)で本事業の成果を口頭発表する。

④ATACカンファレンス2021での発表

ATACのATACカンファレンス2021(開催地:京都またはオンライン)で本事業の成果から得られた知見を報告するセミナーを1セッション担当する。



東京学芸大学附属小金井小学校YouTubeチャンネル

4-2-4 G7・G20各国等諸外国への波及効果や今後の連携交流の見通し(オンライン含む)

日本マイクロソフト株式会社及びMicrosoft本社がグローバルに展開しているネットワークを活用することで、ICT活用の進んでいる学校と繋がって交流するというルートは今回の経験で確立できたと考えている。本事業ではデンマークに絞って交流を行ったが、各教員のテーマに応じて交流先を探すことも不可能ではない。

実際、既にMIEEのオンラインコミュニティでデンマークの教員に行ったのと同様の調査への協力を呼び掛けたところ、40を超える国と地域から応答があった。特にカナダからは同国の文科省でインクルージョンの原則に基づいた教師のためのEdTechトレーニング作成に取り組んでいた教員からも反応が、FinlandからはWizeFloorを使った実践についての情報があったので、今後の発展に繋がれると考えている。

また、国内に目を向ければ本校に限らずマイクロソフト認定教育イノベーターのプログラムに参加している教員であれば同様の交流を行うことも不可能ではないので、全国で200名を超える同プログラム参加教員に今回の実施方法を伝えて国外連携が広がるように働きかけていく。

ただし、やはり現地に赴いて実際にどのような教育が行われているのかを視察し、その場で現地の教員と話し合いを持つことと、オンラインのみによる交流とでは、教員の学びの深みがかかなり違ってくることは否めない。本事業が来年度も実施されるなら(そしてコロナウィルス禍が終息するなら)、ぜひ応募して、今度こそ海外への教員派遣を実施したい。

4-3.事業の継続性

4-3-1 本事業の成果を踏まえた今後の活動実践計画

①モデル事例の創出

ICT活用、インクルーシブ教育の両面から取り組む教育のモデル事例を創出し続けることが何より大切であると捉えている。GIGAスクール構想により、児童は一人一台のタブレットを手にするので、これをどのように活用すればインクルーシブ教育を進められるかというモデル事例は特に必要であろう。授業に関して言えば、どのような児童にどの教科でどのようなアプリケーション等を充てるのが効果的なのか、具体的なモデル事例をできるだけ多く明らかにしていくことを追求していきたい。

②モデル事例の継続的な提案

モデル事例を創出しても、発表し、提案しなければ意味はない。広く世に問うような提案を示し続けることが何より大切であろう。そのための具体的な取り組みとしては、4-2-3で記したようなことが中心になるが、公立校からもっとも求められるのは授業公開である。これについては、コロナウィルス感染状況を注意深く見ながら再開できればと考えているが、難しい場合にはオンラインによるライブの授業配信も進めていきたい。

③国際交流の継続とアウトリーチ

公立学校で、何らかの形で国際交流を実現できているケースはまだまだ少ない。しかし、これからの時代を生きる児童にとってグローバルな視点が不可欠なのは間違いのなく、どのように国際交流を進めれば児童の視野を広げていけるか、といったことについてはしっかりと検討していく必要があるだろう。そういう意味では、本事業を通じて得た国際交流のノウハウは多くの公立学校でも実現可能なものであるので、それについては具体的な方法論を含めたパッケージとして提案していきたい。

また、「国際交流により教員が大きな学びを得ることができる」という点についても、4-2-4で示したように、オンラインであれば何らかの形で海外の教育機関と繋がり、共同でプロジェクトを実施したり、教員の研修を実施したりといったことも可能にするノウハウは得られたので、東京学芸大学附属小金井小学校を中心にモデル事例を作っていく。